

こども相談室

千葉県千葉リハビリテーションセンター 小児神経科 石井 光子 医師



熱性けいれん

Q 『熱性けいれん』とはどんな病気ですか？

A 病気というよりは、38℃以上の急な発熱に伴っておこるけいれん症状のことです。6ヶ月から5歳（主に1～3歳）の乳幼児にみられます。乳幼児の脳は未熟なので、急な発熱によって脳の神経細胞が興奮し、けいれんを起こすことがあります。10人に1人は熱性けいれんの経験があると言われていますから、決して珍しくない症状です。遺伝的な体質も関係しているので、親・兄弟に熱性けいれんの経験があると、可能性が高いかもしれません。

症 状

突然体をつっぱり、手足をガタガタ震わせ、白目をむいて、意識を失い、呼吸が荒く不規則になります。いわゆる「ひきつけ」です。しかし、これらの症状はたいてい5分以内におさまります。高熱に伴って、数分間一点を見つめるように意識がボーとする状態も熱性けいれんの症状と考えられます。

けいれんが起きたときの3つのポイント

☆**あわてないで!**：初めて子どものひきつけを見た人はびっくりしてしまいがちですが、けいれんは数分でおさまることが多いので、落ち着いて対応してください。

☆**安全で楽な姿勢に**：呼吸が楽になるように衣類をゆるめます。嘔吐することがあるので顔を横に向け、口にあふれてきた唾液や吐物を拭いてあげてください。この時、舌をかまないようにタオルなどをくわえさせるのは、かえって危険です。

☆**観察する**：「体温」と「どのようなけいれん」が「どのくらいの時間続く」のか観察してください。それによって、病院に行った方がよいか判断できます。

受診の判断

熱性けいれんは通常5分以内におさまり意識も戻りますので、必ずしも病院に行く必要はありません。ただし次の様な場合は、単純な熱性けいれんではなく、脳の病気かもしれませんから、すぐに受

診して下さい。

☆ **けいれんが10分以上続く**

☆ **一旦おさまったけいれんが再びおこる**

☆ **体の一部だけのけいれんや、体の片側だけのけいれん**

☆ **けいれんの後、1時間たっても意識がもどらない、手足が動かない。**

予防方法

統計によると、熱性けいれんを起こした子どもの55%は1度しか発作をおこしていません。3回以上おこす子どもは4人に1人程度です。成長に伴って脳は熱の刺激に強くなるので、けいれんは起こりにくくなります。基本的に予防する必要はありません。それでも心配な人には、体温が37.5℃を越えたら「ダイアブソ坐薬」を使用するという方法もあります。詳しくはかかりつけの小児科医にお尋ねください。

こども急病 電話相談



受診した方が良いのか、
様子をみても大丈夫なのか、
看護師や小児科医が電話でアドバイスします。

プッシュ回線の固定電話・携帯電話からは、局番なしの
#8000
#8000は、鎌子市及び旭市の一部（旧藤岡町・旧海上町）の地域からは
ご利用いただけません。

●ダイヤル回線、#8000をご利用いただけない地域からおかけの場合
☎043 (242) 9939

●相談日時は
毎日・夜間 午後7時～午後10時

緊急・重症の
場合は迷わず
「119」へ

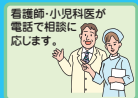
お子さんの急な病気で
心配なとき…



局番なしの
#8000
または、
043 (242) 9939



看護師・小児科医が
電話で相談に
応じます。



実施：千葉県 鎌倉市 鎌倉市医師会